

システムによる飼育日誌作成支援に向けた日誌データの分析

○吉田 信明¹⁾*, 田中 正之^{2,3)}, 和田 晴太郎^{2,3)}

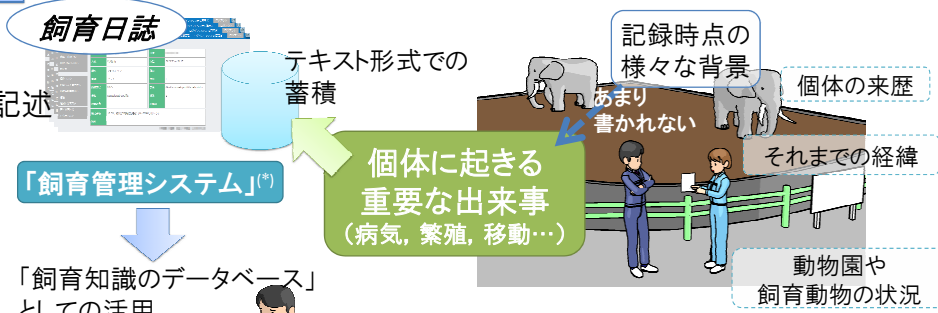
¹⁾ 京都高度技術研究所, ²⁾ 京都市動物園 生き物・学び・研究センター, ³⁾ 京都大学 野生動物研究センター
* nyoshi@astem.or.jp

本研究のテーマ

事後に活用しやすい飼育日誌の作成を支援する「飼育管理システム」の実現
省かれがちな、組織内の暗黙知(日誌作成時点の背景・流れ)の文章化を支援するシステム

動物園における「飼育日誌」

- 日々の動物園の飼育における、「共有すべき重要な情報」の記録
- 個体ごとの重要な出来事をテキストで記述
- 日々の情報共有と、飼育知識の蓄積
→ システムで検索可能としている
- 細かな背景情報は記録されない傾向
→ 的確な検索が困難



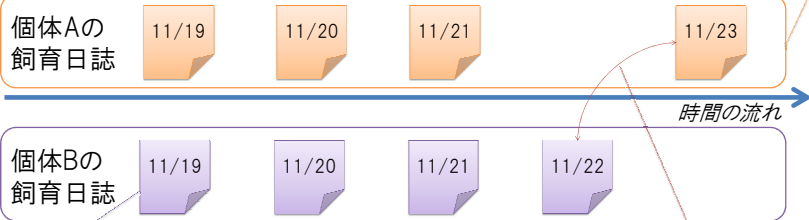
日誌を作成する時点で、「よい日誌」の作成を支援できないか?

(*吉田, 田中, 和田: 動物園におけるセンサーデータ活用に向けた飼育管理システムの開発. 情報処理学会情報システムと社会環境研究報告, Vol.2014, No.8, pp.1-8, (2014).)

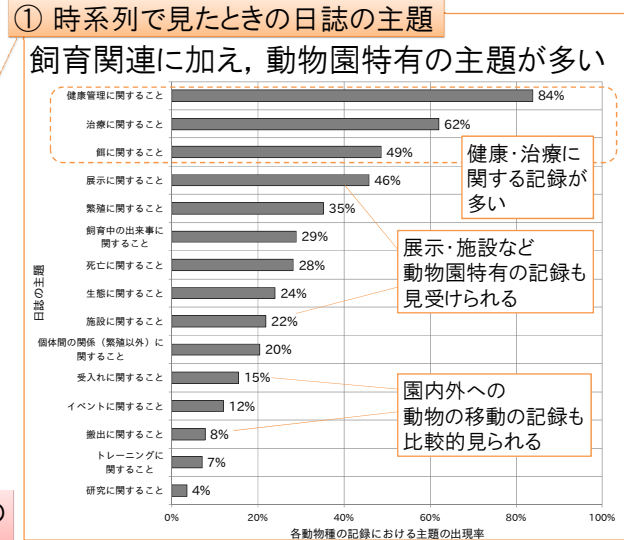
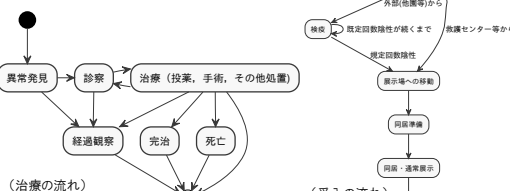
? そもそも、飼育日誌には何が書かれていて、何が書かれていないのか? → 実際に飼育日誌を読んで分析

分析方法・結果

京都市動物園における2014年度の飼育日誌(約1万4千件)の動物種・個体ごとの「主題」(内容)とその時間変化を分析した。記録内容の傾向と、知識としての利用に向けた課題が明らかになった。



- ② 主題の下での個々の記録の記述内容の時間変化
- 主題ごとに、典型的な流れがある。
 - しかし、個々の作業が日常化すると、その終了は必ずしも記録されない。



③ 他個体との関係の記述の状況

- 個体単位の管理体制を反映して、飼育日誌も個体単位の形式になっている。しかし、実際には他個体と相互に影響・関係し合って生活している(繁殖・見合わせ・伝染病予防等)ため、形式と齟齬がある。
- そのような他の個体との関係は、特定の個体にまとめて記録するなどの工夫がされているが、その方法は統一されていない。

今後の展望

- 分析結果を踏まえ、日誌作成支援機能を備えた飼育管理システムを設計・開発する予定。
- 方法: 実務的観点からの概念体系*(オントロジー)の構築→飼育管理システムでの活用
 - 新規に作成する飼育日誌へのメタデータ付与
 - それまでの記述内容の流れを踏まえた記録内容の推薦
 - 既存飼育日誌へのメタデータ自動付与

(*概念体系: 動物園で使われる言葉・概念を列挙し、その意味・関係を明らかにしたもの)

